Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

60 65 70 75

官許 朝鮮牛肉丸

大包代十五銭
中包代十銭五厘
小包代五銭

官許 人参丸

大包代十五銭
中包代十銭五厘
小包代五銭

出版御願明治十年十月廿六日

大坂府平民 芝区日蔭町二丁目一番地寄留
編輯人 雑賀豊太朗

星藏区横町三丁目
出版人 辻岡文助

文錦繪問屋 金松堂

上州高崎田町 亀井屋卯兵衛 越後新潟 沈野 越中屋喜八
文心堂 櫻井勝吉
前橋 橋本屋文次郎 三藤 青柳正兵衛
沼田 塚田屋佐太郎 加茂 獺尾小左衛門
富岡 開文堂吉次郎 飛騨高山 番場吉次郎
藤岡 松野屋貞吉 山本屋金太郎 浜野屋重兵衛
野州足利 水琴堂為吉 甲府七日町 西川庄左衛門
信州松本 藤屋機左衛門 明堂正八
諏訪 山口萬吉 武川半七
越後長岡 竹屋利七 青森津軽 柿崎忠左衛門
水原 嶋屋六平 渡島函館 魁文社

文書肆 東京横山町三丁目二番地 金松堂 辻岡屋文助梓
地本問屋

蔡孫馬鄭英傳

ひとの巻

柳亭痴国改画
童松堂梓

48-8350

榛名山の朝朗
箕輪村の夕霞
黄旗の群馬
噺
第一編

中

金子杢之上梓

箕輪村

上

夢旗

鮮高斷

咲き櫻よるぜ駒繋ぐ駒がいきめば花ゞ散ると花を傷むる風
流男あり絲ど書肆が需めよ乘出しゝ中野原野よ群馬の
斯まざく拙稿手綱さらた腹帶メくも佳興大坪流の曲乘
ハ熟せぬ編輯よ過る業と確固鐙よ取着て危い初編の
鞍よまさぐり何うやら柏子よ乘ゞ来て三編の讀切まで
やもまた駈出も趣向い出来たゞ看客諸君ゝ尻懸
へ鞭を當らも面懸よ恥を書まで泥障よ乘りたゞ御愛
顧と力革と夜間為業よ金松堂ゝ迫立らもてのをしやく
合せ櫻の様よ美ーく発兄冊子の前後錯雜の合巻ゝ不
風流よも固辞付さ序文を自ら書エ爾ゝ

馬車の往来を詠ゆゝ
仮川町の煙花室ゝて

明治十四年四月午の日

彩霞園柳香誌

石川群馬四等警部
頂氏紋付裏盗紋弥

森群馬大書記官
紋弥妻おてふ
歎願書

蓆旗群馬噺 第初編上の巻

彩霞園柳香著

一犬虛を吠て萬犬実を吠る道理古より今世の動るまで
良もすれば此智愚の徒と煽動し其挙動に乗じて己が
不平の積鬱を散ぜんとする者多し是なほ近く
い越後の国岡部刀のごとき紀州の児玉三雲茨城藤岩抔
の農民暴動よりてい如き也政府より抗ひて不軌を企図の
行為あるこれ実に愚民を誘ひ義民の名を空しくし官を穢
性なり愚民を制し衆庶を救ふを動たる那の仕会
宗者の輩いまさ比類なき者なるべく近年の一揆暴挙
と唱ふるい愚に実よまるところと其挙用ドうぐるい不
謂一犬の虛よ吠る紙実よつてさく嘶くがごとく其愚や

つゞき　笑ふべー
千情や情なぎ
のこゝ為よ明治十四
年二月初旬
糸の西ゆ
四十銭を距る
群馬絲（上毛
茶格）や西群
馬郡ゑそ同
郡中四十八ヶ村
の者共ゞ橋
名山の藤棄よ

集合ー
絹ゝるゝぬ
勅諭ゑそ同絲の
大書記官たゞめ
紡績官も出張の
上脱よ吉倚の
ぶんえ蚕へ魚接ぜと
ゆゝ蚕ゝれし絲ゑり
并もとの一接の
と関よ様名山の
藤棄宗中戸と
いくゝい花漢ゝる

八十一ヶ村入会
の地とて豆を稼
場に八十一ヶ
村のうち
中野組
外十二ヶ村を
判元十三ヶ村と稼
陰ノ村外六十一ヶ村を
明蔵村
十八
円九十
八銭を
課せう
よって代るぐ
年番を立
その
税金
と又

札下六十ヶ村とうへう
判元
の名称を
賞ノ金
八十二ヶ村の
戸数
人口
村ノ
寅歳ノ
年番を
稼永と貢納を
札下村ノ
判元
の切符をうれい
稼物より豆
るを
判元札下の
稼呼番西沢ゆう
紙見とも
現分判元十九ヶ村
の共有とのふみもあり
官民有の区分
曖昧よって数百年と経ると

つゞき　郡村
徴收上納
するとこの
あつぬ仏性
数百年の
旧慣一変
して明治九
年地租改
正実地測量
の拳ゆるふなん
で野村松の沢村
の地先字八町歩

同村地内の皮肉地
とゐ（元徳愛用
政府裁許渝絵図
を極るとゝどまるよ然
るや否やハ考ふ）明治
十一年終る本條例頒
布ふり松の沢村清水
某の同編入を終て更の四十
町八歩ハ然る未だ地付んとして
板藤の有を口藤ハ同人
（口藤ハ同地付文ヶ村ゐ）若地
村外ヶ村ハ板藤を紙ヤ

つぎ　氏も国ド果て入舎
抹物絵多本仕
立郡出入錢ら
ぞ絵ひゆー
ゞ此時松の沢
のゝ〳〵却ゞ
ゝ〳〵ゝ地租
改正の時一村松の名
義と改まり入舎の
名義とのゝごまべ
ゝ維明治十年

山形の猟銃を
惹起せ奏とへ

ゝ沢出入眼鏡

ゝ初
年

ゝ風
俗
年二
維
ゝ
ゝ
ゝ

つづき

聞くより角
角田の
吳重なるを
河窪一人は
絡るまゝ
鼻屬は要ん
ぜざらん事
と逃る壓
仕方の下あり
一日も其ん
じて居る

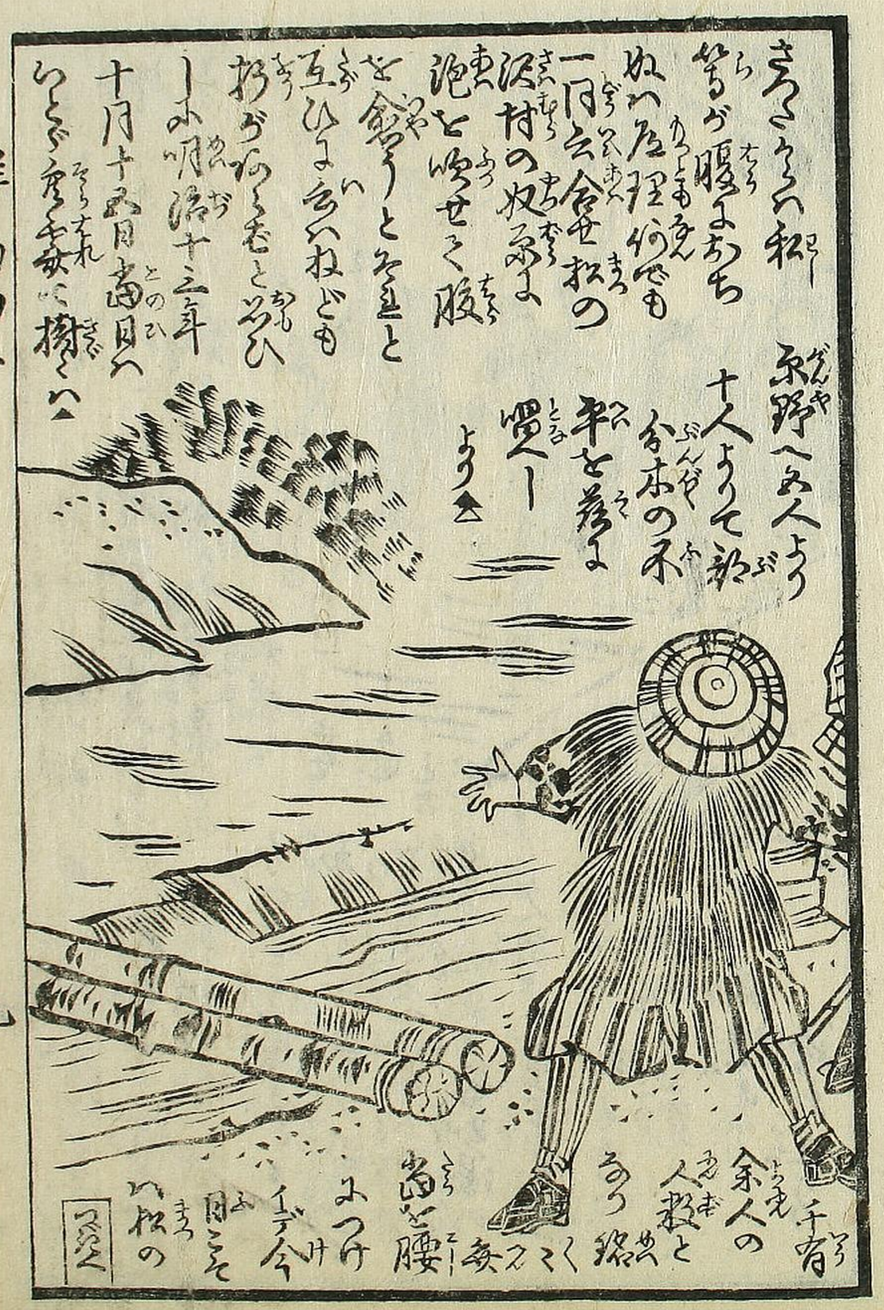
紋

▲松の沢村の
祝合を終すま
ゝ
その
南を
得ぬ
我後
も不事
み拵へざ
ども不都
合の業
動かる

うつざるを
縋し西条角
鶴と郡中
は重名を初
ら五人私とも
は来ぬるこた
へ金去陸ば
絲のは来てその
裁判を尋問
最も人屋もかうる
よう中野孫場の一楽の
女智勝昧の小言性へ

つゞき

背くの北五



つゞき 沢村の農を
脅して巻るが図へと
どつとあゞたる騒の
ものくこのことも
み聞るを
を伐例
しみまう
ゝべ

▲慌と笑ふ私の沢村の農民等いかゞ
俄ろみ人ゝ集りこの
私案を

▲一統出て防げども元
寡勢にて敵出べ
き遂に敗北ホ
分の一を伐採さるゝ
ありしまで出ちみ出張を
敵を案友(帝の出張)
巡査邪吏等も出張の
人割さるゝ中く
べ元動揺もなく
敵邪吏を罵しり
兵室さゝく
強ゞ立ち

群馬初編卷の中

彩霞園柳香著

中野原野へ集合せ一統の民芸い騒祈巡査が制する辞と
耳にも入ばこそイザ此上い区長よ舎て結問せんと一同い原
野より退く操出し舞輪の城址宮城源義によて人数を
探へ西明屋村に入り墨十九日い濱川村宮道場の来迎
講舎に舎宅し明る廿月を待て松の涙村浸地の意城
同ひその通義によつくい弟を棄ても半とゝなさんと貴く
陰ぎく演静べる動静も変りなくしが同新標村
の縣舎後寛志村虎之氏ゞとの騒ぎを聞きうち驚た
コハ捨ちるとぬ曲くしたるあり疾く練捨をせざるとたい
大事み及ぶも知るゞとし心を痛めるゝ日ド

つゞき

つゞき

今度こそと云入てうち取うと云流み
入て行る程なく立出る三の流
級孫あくとゝるよう既
と慢げ言つく見ひ
ぞ物はあ石の口出
堅え空のゆくとの愛へ
性せど止らぬ勢ひよ止ゆと慢ぎ
事面ちで出渡へ事せーろど

彪

純

▲長

殺して始
む
る程
でも

なけれど半
高潮中
涙も
望と
よ事
分の上

來迎精舍

▲力を拵

めて制しと思うと雄を
望よう彪之氏拳を
ちあて扱云やう和尚
顔蒙の一幼より
稚場の愛垂と
つて不苗の多ず
なりとそ若浪
と顧ざるのべ
拳でざる流
のなる慢ひ時
突を察也▲

今度のごとき
拳なるときハ
飽まで制し
止まるが本
と思ぜう
るるべし
されど今度
及ばーる
今日までの
拳動へ
見把色
こで

つぎ

しょうえん

袖振合

彦

純

▲和服を勧ゆ
あんが絣は
紋紗へ新手
てそそとそ

▲一統へ我く
祝は老ゲ皇む
及ぶぞ
みゲう

みを
栄れ
を紡ち
一統
の精
神異
徽紋を
中ゲ皇
かくさん衣長ゲり
この長袖ゲよう小弟の元へ
ひとりしさを仲裁を任
せるへと理を説て

敬

綾代のめのどもう
絞絵の色
て引掛へ
えん唯氏
えへ美
ゲ赤
の涙を
めてこ一
絞のきを
あん考
ひを
次へ

つゞき
吉

彫

つゞき せんと金く
云分のこゝろ斗
らひ合ひこゝ迄をた
め一統の衆の外歎ひつ
雪く毒人が弟と相ゝ
らひ同年十月廿日ハ
上芝村ゝ和解の
宴を開くこゝ迄変ー
中野原世ハ地形よ
ゝ八十二ヶ村を区分
ゝ稱合して総代を立て差
ゝ和解と結ひ合るその約定

雜木伐
ゝ定決
村ゝて新ゝ開
きを懐
ゝ刈
松ひと
名づけ
元廣
山入
きる

書かたの正一分新や約據
名山ゝ宮有練協家
中堀稱城中ゝ入会村のゝ
松の沢村清水勇造外七名
後村宮有地と猟場一約分
本成規ゝ基づ
去る明治十年
八月十二日本約
長宮の件
可と乞ひ
聞ち明治十二年
一月廿二日件宮ゝ

元の
沢村紙
長宮の義人届け

ゝ十八日ゝ為る入会弁村
元廣ゝ給て書ゝ
聖練協中入地人松
の沢

つゞき

出ゆきの其内扱ひ人を入り且
各村人民及び左長等数代人よ
ばれて和解たのかゝ系
一條松の沢村清水
第七外七名よりなく
及別に十八ヶ所余歩
の地へ全く及有
祿場を後村
宮地と倶う
ひよつて元濟中走きり
第二條長き永谷
と称一有ゆい

▲新谷丈地を
役ゆいを横
ろ
刈
長人
の長
の内

本沢へ入ひ
下げ沢すの
えへ入今各村中く
代祿中ぎきろ
第三條松の沢村
ろて中堂祿場
を濱寥して改正
地ら藩より死戦の義へ全さく
今日刺絵
の上へ各村人民より拾
て不同より盃中べきろ
第二條各村内ゟ入祿場へ

▲倶中
まつて
松の
沢の

人民一和
有地へ苅入る
入る人の義
茅二條
のわく
不同よ亟
中ごろ
組し向後人民西の地へ苅入る人の義
史して絞まま
吉
▲拾て仮降彼是考情
中まもなく和の義六條今
國の費用
金六五六

茅の茅又條
旧地分名村
よ於て初の沒村
新分未地人扱
降こそ達
暑所去に
出もも金く
入る茅村
代理名称ま
きかつた今回
和解お懲よ
くハ名村ハ
紋
▲茅と色別
長閑いたの
ゆく適度
たろる
◐べきまの右和解
お藉ハくハ発見ハ今月
までの濫意和解一更ま
つゞく

佛国法律書
つゞき
和解の端緒開く
集会せ農民い
村の宴席
村の宴席
約束の

十八人と宣ふ
熟解せーが

つゞき

去程後藤の事よりは一統を
怪ノ那長人呈されー去ては日く
「天晴陰聽人賊悪。一端
一緒の窮。
逆流動石
白川水。怒
拂樹松黑
髪風。拔き
気滑秋紙
霜。人情氷
解巷編宮。
此融出和

▲若知雲。元祖榛山呆轉云
源氏扱云のたらるものへ人多雖も
知ざれを元義奥と云へり
南貝解数ー

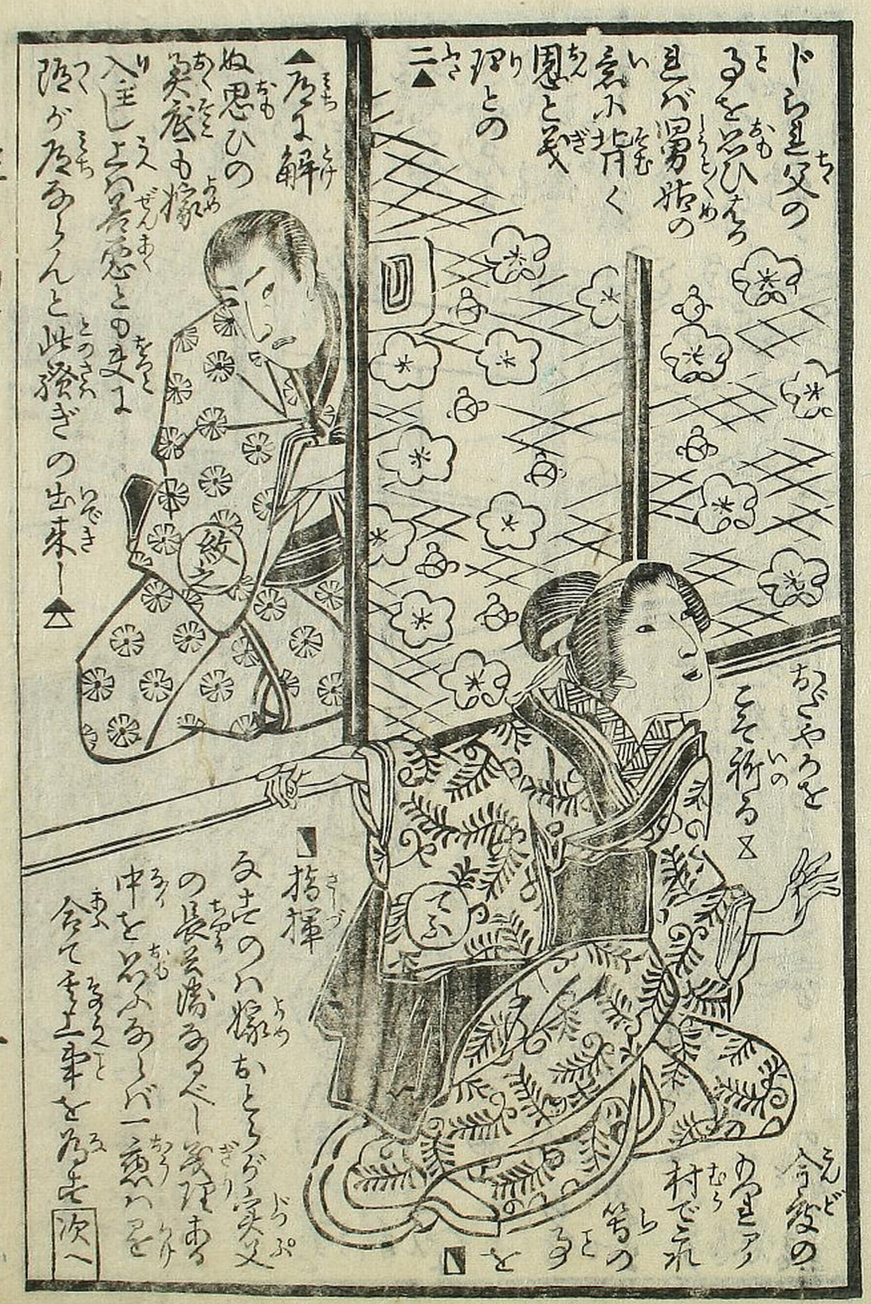
蓆簇群馬嘶第初編巻の下

雜賀柳香著

総て双方の和解整ひ約定出来と云ふ段ーー上一同連署して是まで
松の沢村より紀分ふとを寄附成せーー本田新ひいげの義と祭礼へ揚げ
ーー手続ーーして約日と種ても可否の指合なりざるうち松の沢村の者
どもい上芝村にて云結びーー約定と遠変して彼約ーーせんと書くまお
終ーーして日人の総代人い東京より出で南洲免作代云ーて有名山ー
初行氏へこの約定役約のるを委任せーーー同氏もえ必と云るところ
なりたる役ふや正結ーーく遠ーー総理の代云人とあり彼約の掛合ー
及びうい抑ーーまさ処ーー役障あーて彼る遠約と云出るとの一説
もなるあるグその虚実のあ約い新ーねど暗らくその関係ーーきと
茲ーー説出ーて紀さんー那の大総代ーー陸後保ー後の助とーー一刻
なりく猶年松の沢村の柏木長云湾の根かとーーとを要り

次へ

紋


紋之
てふ

つぎ

べらよ
我まゝなる
振舞い
奢や猥へ
人情と知
らぬ男と
女郎の枝
さゝ言つゝよ
級強い微
笑を如の恵
癖と笑へ
そんなる子宮
も出るであろう

紋之

▲ぢうしろ
のとゝみ〜ぎを
を出して開き
さまてい科の
者と
科
人よ
とて
らる
場の出
け事
と態
と事の記る

万一猥のはゝ
松の沢へ初恋
さ

▲あり

▲うつ方の
そぶん▲

もれの沢で人
よ初る恋
敷代の農家さ一村
のあるとなるべ好と俳い
けも子を子の猥や奢
の傷よひう
恋よるる
浅恋男で
子一已も今愛の
一群い初う知てい
長さる恋ど手方とたゞめ
級ゝ動よ恋ゝ佐一茂の八▲

紋

一家の者
ま濡
しく怪
長三郎
ゲ芸ぬ
の陰
小撫
代よ
避れ
子男ぞ
と歳公
まると生

次へ

つぎ

合点ー結りして今度の一案いかま人の乳でいかうゐると決心をしてとぎんまと

[illegible]

[illegible]

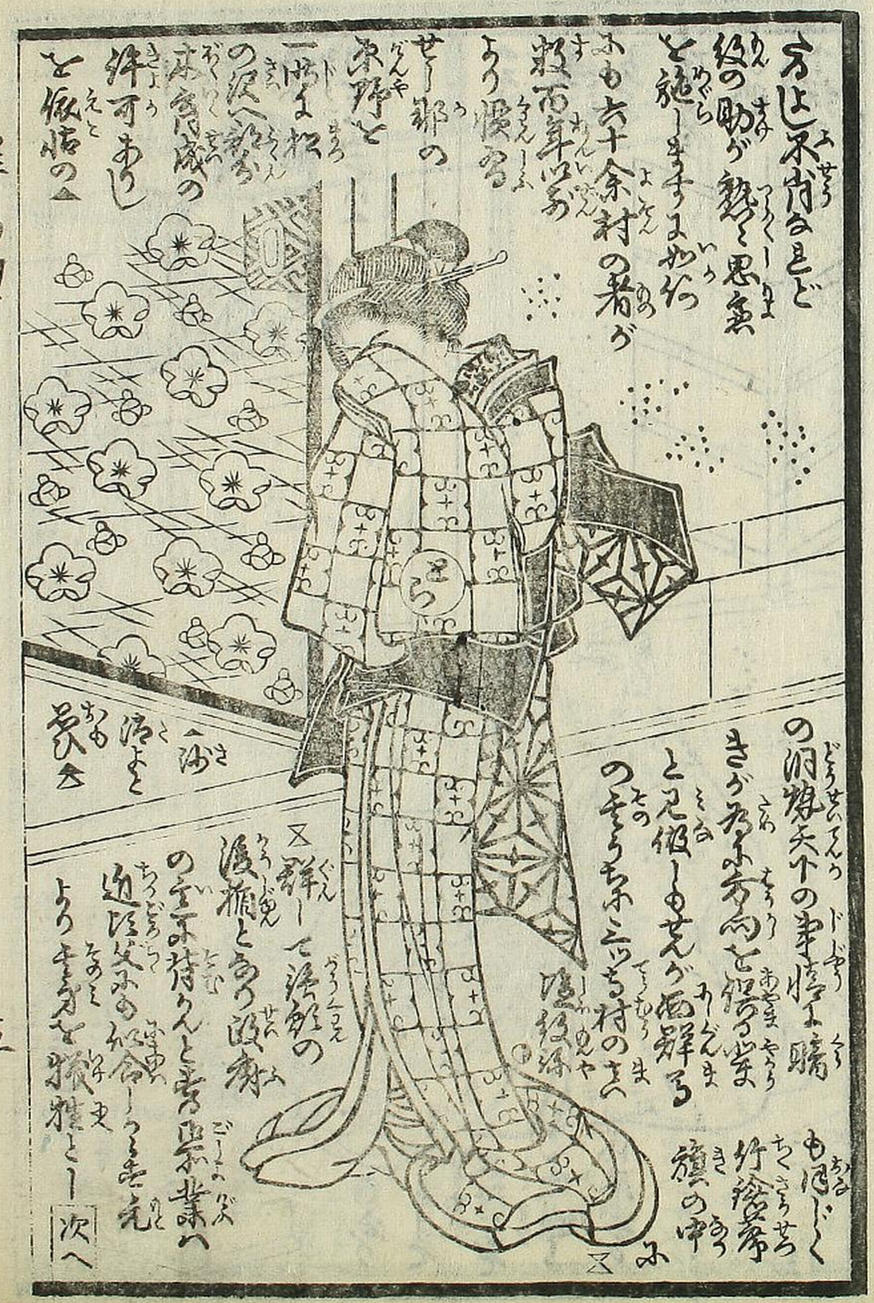
[illegible]

一撥して苟くも
暴の
拳を
ふるひ
ありと
思へ
されど
と機敏よ
中型の
野と林
物よりも
まだ撓まし
と立決ひなり

△俳め
初る猪ぎ
ありしを
ならん
ど迄不

紋之

◎谷信村
の
亀吉と
人も知
つる
身
みて
頼民
率み
侠徐も
せそ忘れ



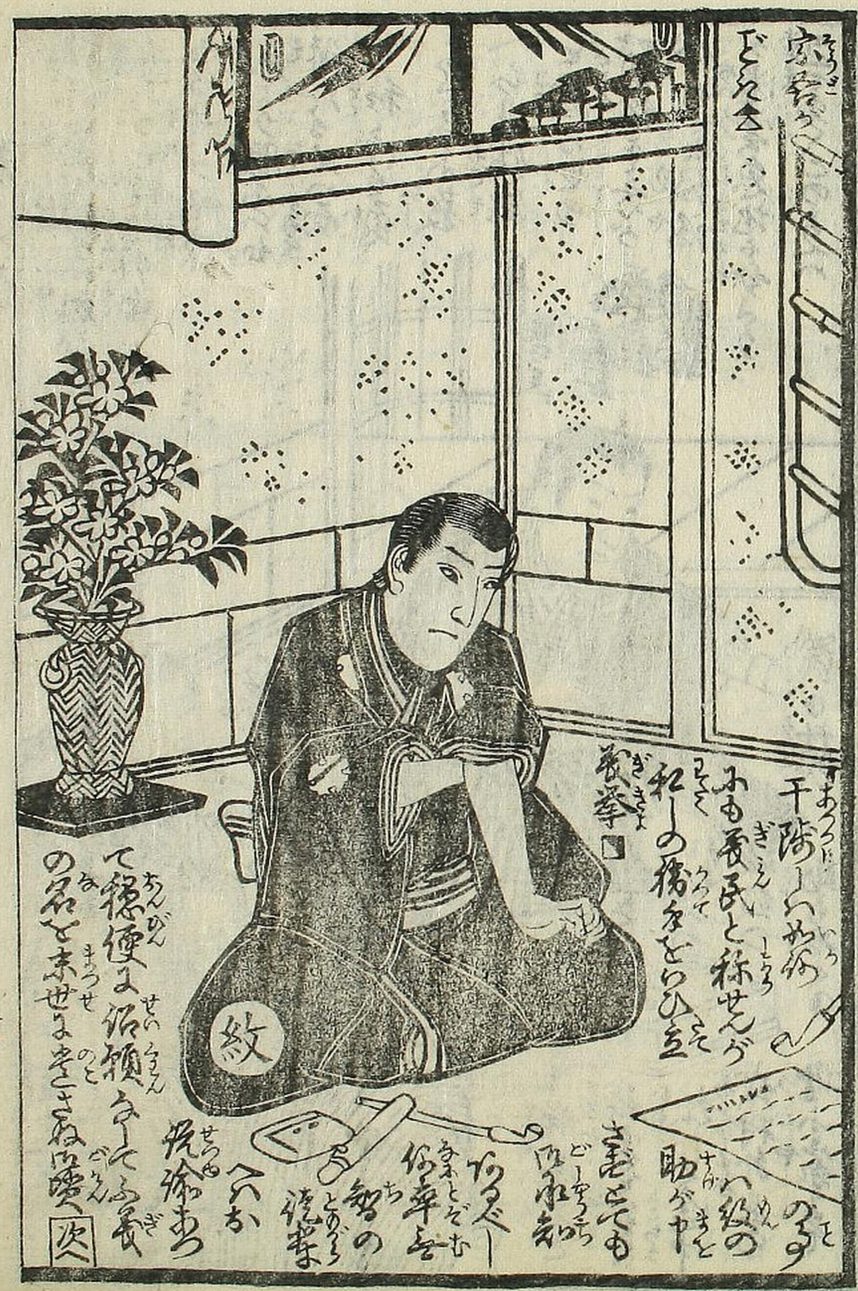
方は不肖なれど
紋の助が熱〳〵思案
と絞り〳〵まつよりかな
ふも六十余村の者が
数百年以前
より限る
せ〜郡の
不野と
一世よりの
の沒へ郡
不食成の
拝可あり
と依怙の△

△浴よと
吳△

△詳しく浴船の
渡瓶と言ふ説家
の全く持うと考る業へ
迂怪笑不の紹介しつる元
より手引を猿雅と〜

次へ

つぎ
紋之
長


紋

つゞき

つぎ

静と豆剣は二人の百姓が
きもを潰ぐ横火は暖り稼場
發ぎの方法しも実人なりとい
毫新らまだ勝負を傳
あつは一人の男は小者よりナンドかあ
ぐさまの法の且飛ぶ今新集合所へ
お出ゐさつて法しを安
さう都らねと
なんとい法さうが
亀
傳
拳
生死の三ツと今自
聖首のうち西州
金村は黒漢州
村の百
村の百
坂人
集る
横ふ
ふと
ふが今
人が今
て往病風

法しやる今新今年
弥の林村作七さまの
愛宕村の松本秦二
さまへ宛しやるまいのても
今度のことは大勢寄合て
悪いうち已に文部ひ出るま
よつて一ト先食へうと松人と仮ての外の
徐し方はのうはの沢やうならねども
大勢抑ろみてまごく出るとは出来ぬと福作
村の長本さんがを地法てのお法しを
一統その外で中く動ぶまこの上
はまの陸さんを総代に新くこせね
品川四区長の小村さんへ出張判と

紋
武
桂
喜
無
あの
青
陸の
新聞
人行わ
大勢の
歩とまて
ぐさらつ
又新紋
の助
家
猫
次一

つゞき

はとらへ松の
沢村の柏木長兵衛
ゞ狼由来縁の縁ゝゝ
柏木ゝ新こふ来さ由来
級派さ為もみの可也さふ
今度のみとゞまゝ横
りでゝ上ゝと言つや
るゝも知是ゝのと六
十ヶ村の俳判ゞゞアノ
俗の学者でもふの恩也へ
遠ゝゝ者ゞ考じ已らも
女房ふゞす也ゝゝの
この後ぎ仰でも考く

喜

泰

△このまゞ繁ド
らゝと張しの打
ゝゝ吹まゝ風
燃えたる火を消
せば俳しも消
えて答くへ
右と左ゝ人
知たゝふ
級の助へ
小首を
傾ふけ
考問
只案

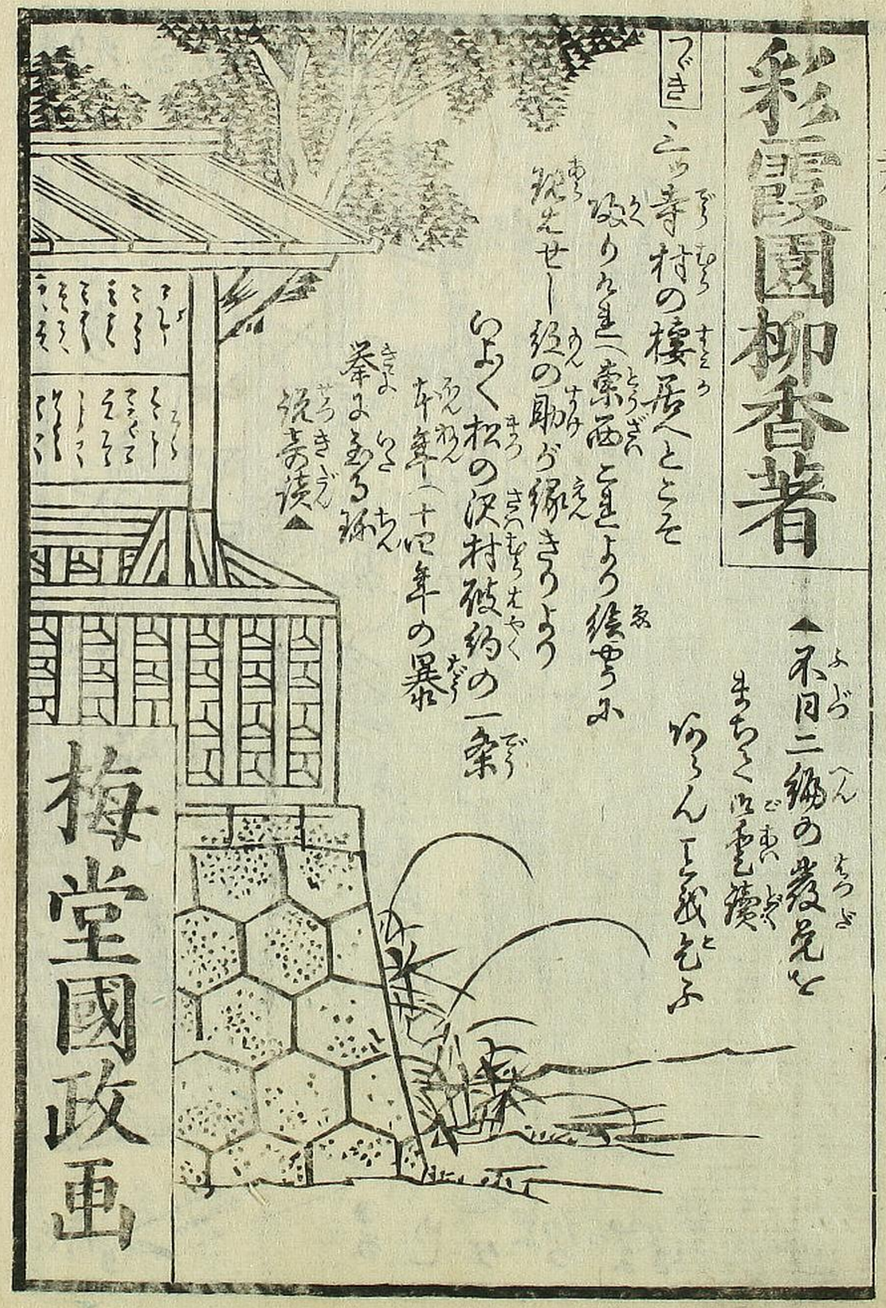
えゝ考ゝ抹仰みゝゝ
さ是ゝ考ゝ人衣と
的ゝ生活
小村つ湖
縁とゝゝ
ゝつ南
紙の面
紙と
ゝ
のと遠
ひ海

△財
ひたい
元
あへゞ是も活斗
の種ゝゝ記ゝ喧嘩ふ
花ゞ咲のでなゝゝ粒ふ
ゝふ生活の旦那ゞアンチ
二段根生でへ△

紋

の体

△ゐ
ゐ
ゐ

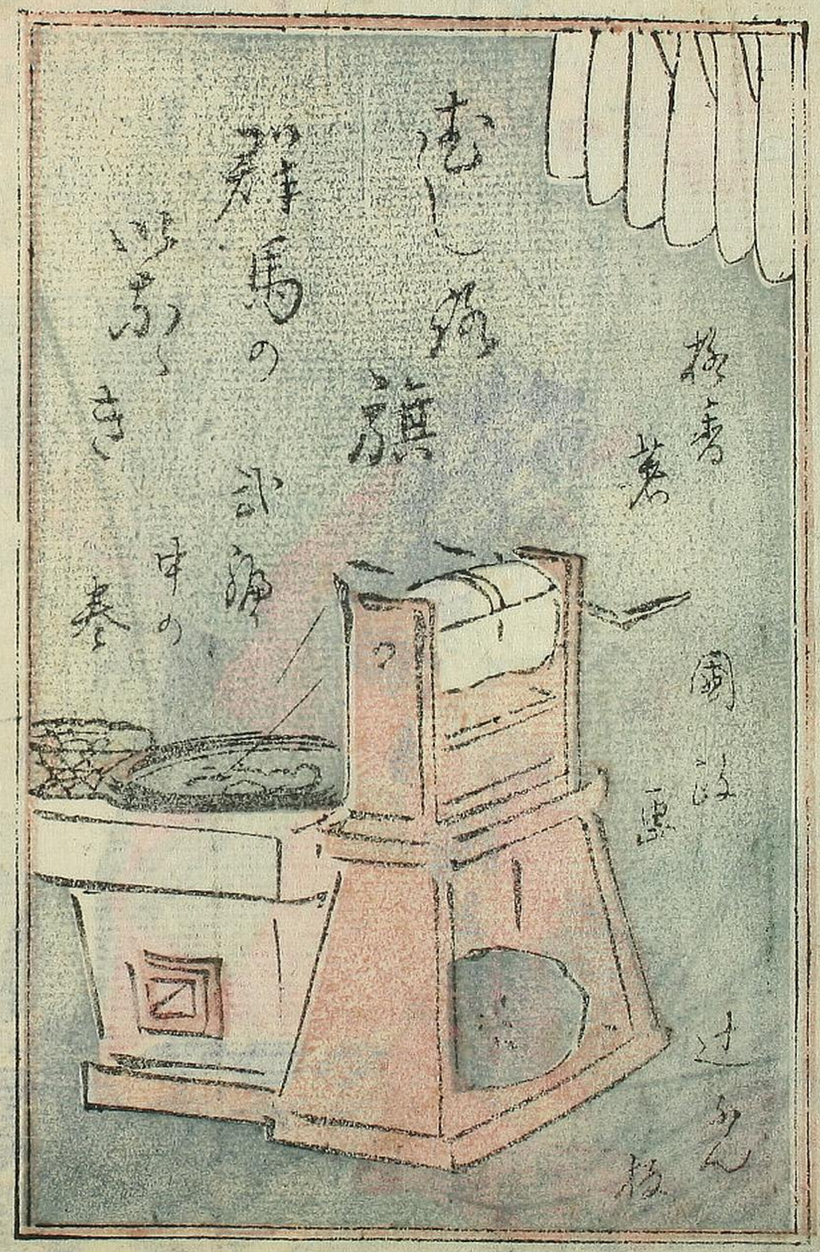


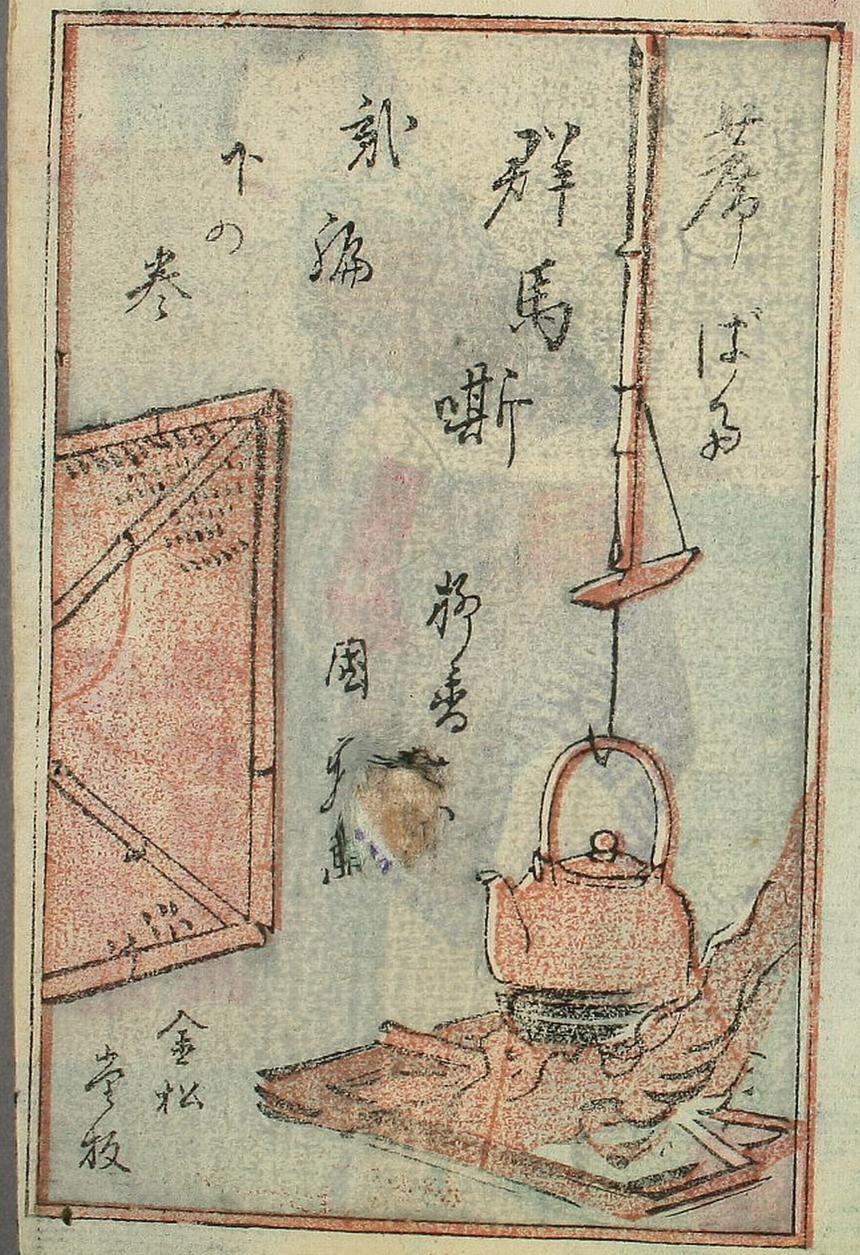
▲不日二編の發兒と
まちくひ重寶
なるんとぞ

つゞき

こゝ寺村の樓屋とこそ
取りかなぢ（索函）とぢより繪ものふ
秘せし級の助ぶ縁きりよう
いよく松の沢村破約の一条
（天保十年）十四年の暴
拳よ多ろ孫
祝妻後▲

蓆籏
群馬
嘶
茅
武編
魯亥閲
中
上


拝書
薫
忠孝
旗
群馬の
武源
中の
巻
国貞
辻元
板


夢ばくの
群馬斷
武源
下の巻
拝書
国貞
金松
夢枝

幕籏群馬嘶第二編序

我京文社の軍師と頼。雑賀盟兄い合巻の。趣向ゑ富て謀と。惟幕の中ゑ非して。机上ゑ廻ま筆才子。賣勝事千里の外ゑし。毎々かそろ感腹ゑ。中ゑ取分け此度の幕籏てゑ商籏をも。金松堂の店頭ゑ。翻しなる初編の出陣。なる一戦ゑ数万冊と。賣捌たる群馬嘶勝誇たる筆ゑ任せ。此機と外さぞ賣出せと。面エ筆耕摺工の。諸勢と揃へく二編の出版。製本美々敷武者振い。實ゑや地の登るゲ如き。味方の鋭気ゑ乗地ゑるり。陣笠首をワン出して。此端書ゑ凱歌上る

明治十四年
四月下旬

いろは牙多の　伊東塘橋誌

梅村傳七
士族山田難作

士族山崎松多
青木亀吉

幕籏群馬噺第二編巻の上

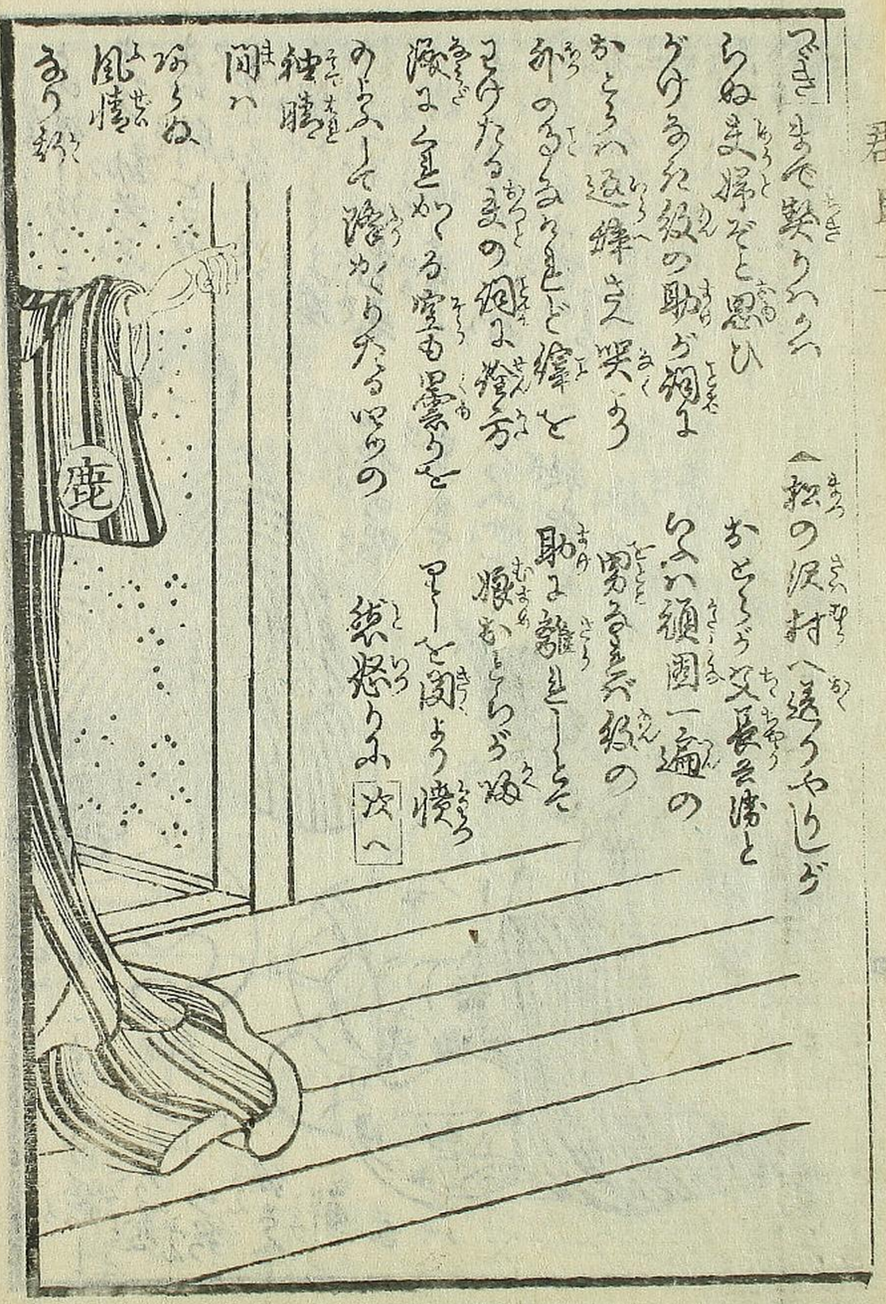
彩霞園柳香編

[illegible]の林子平氏が著述に曰く父兄州に[illegible]小人は孝悌忠信を篤くして義理を重んじ[illegible]孝悌忠信なければ[illegible]人倫を一身作[illegible]義理を[illegible]とも[illegible]しく[illegible]義理と[illegible]思い[illegible]ざれば[illegible]世に遺せる[illegible]どく[illegible]級の助へ不圓も村井[illegible]そ[illegible]紙関を[illegible]稲[illegible]湯[illegible]と[illegible]よ[illegible]父の[illegible]と[illegible]ら[illegible]家[illegible]居[illegible]へ[illegible]と[illegible]疾[illegible]名[illegible]の[illegible]級の[illegible]

つゞき

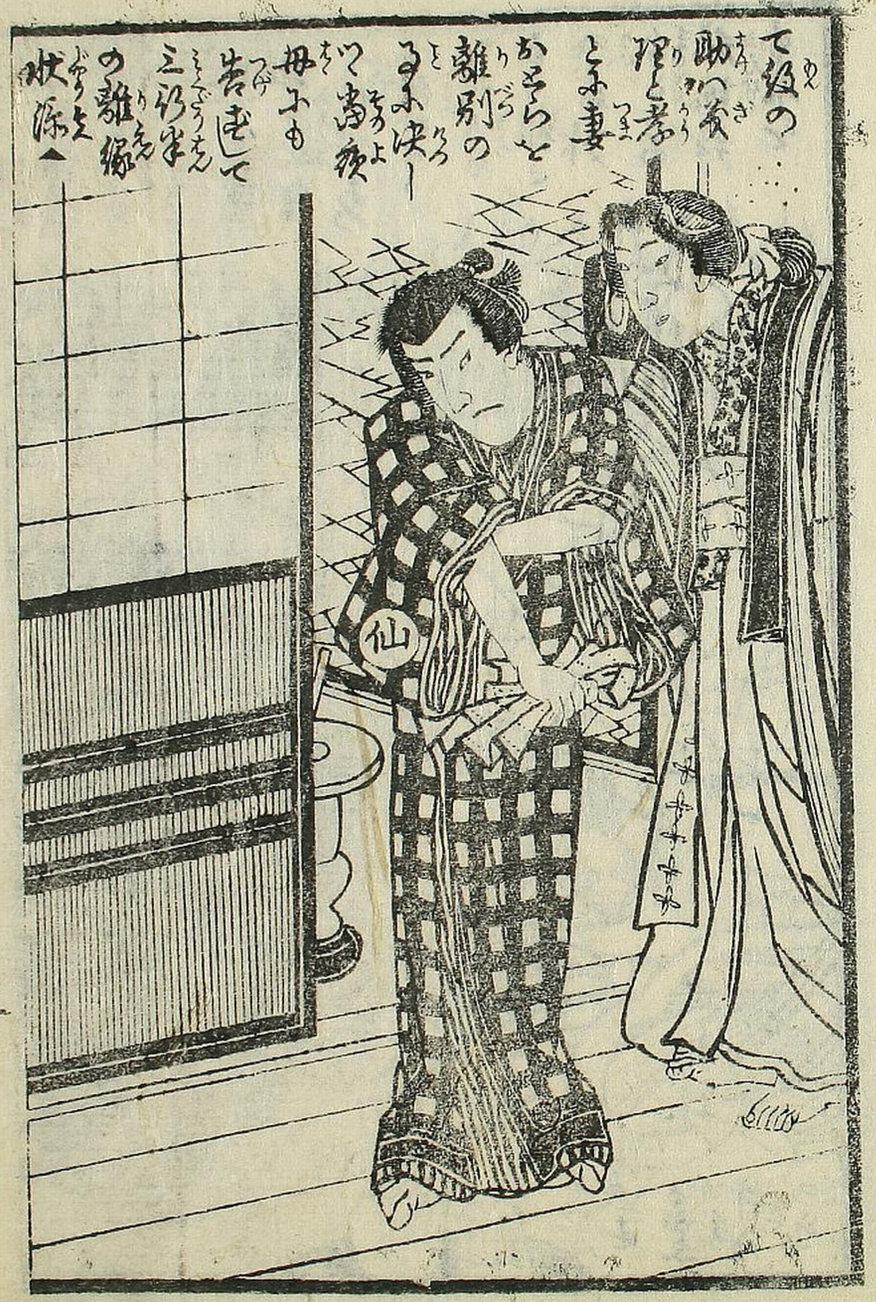
つゞき

つぎ　まで送りかへ
らぬ夫婦ぞと思ひ
ぐりあひ級の助が親よ
かとうへ逃げ出す哭き
郎のるまとど縁と
こみたるまの親よ登方
濱よ自めてる空も曇りを
のふして濱かくりたるはのの
独膳
聞い
なりぬ
風情
あり



〈松の沢村へ送りやしが
おとこうの文長を濱と
らへ領国一遍の
男をえび級の
助よ離れしそ
腹むとらつぐ
早一を関よう憐
紙怒りみ　次へ

て級の
助が義
理と孝
とふ妻
かとらと
離別の
涙決し
て尚後
毋ふも
告げて
三行半
の離縁
状添へ

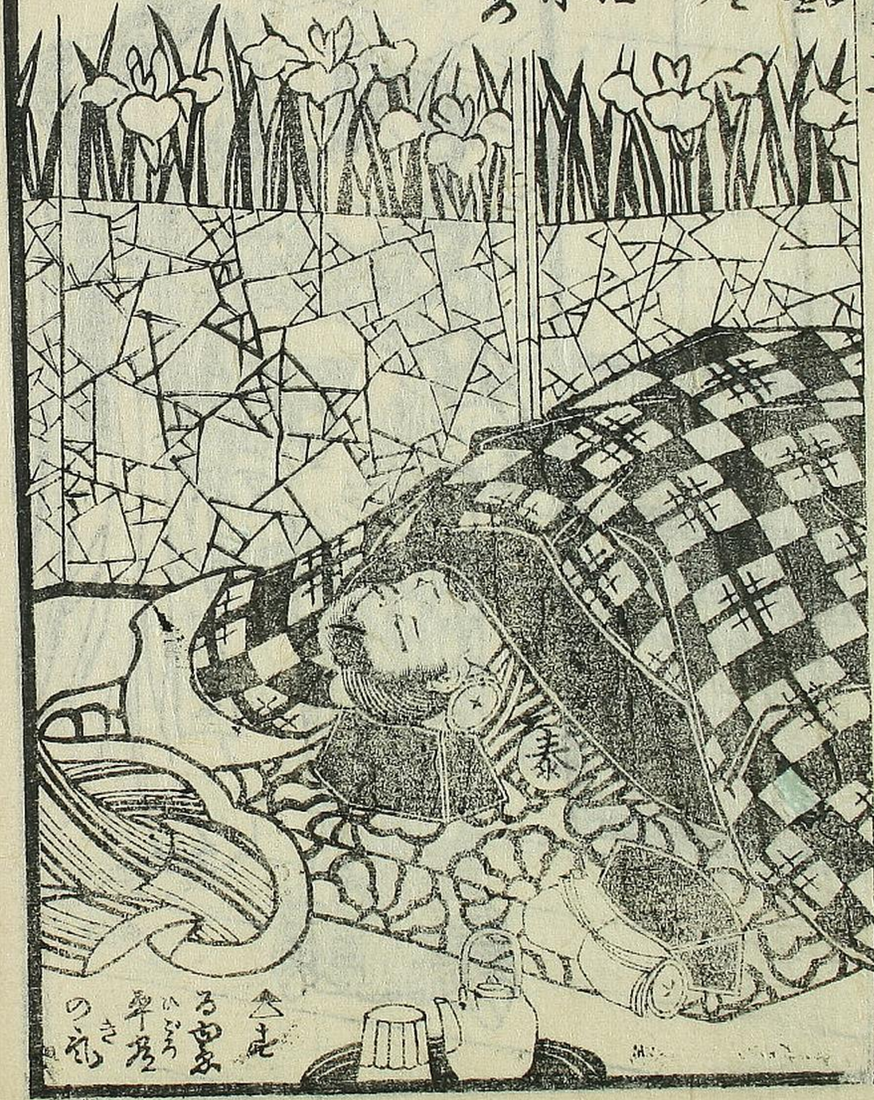


つゞき

孫兵衛

羽織を用意して結て宮ち村の去淫方へ紙付て狼ちて科あて狼ちを取ちめ

なく離さつゝ中や家分と自ち稼場紙分本を



▲鹿る兼
平左の
の

根ふ紙
て肥ち
猫と遊
出し
のろ丈
ゐ
丸ふ
丈丸
らうが
地上雅藤つけ
とて宮易上ウンこ
れ和せぬと書義主
ての服主上級添へ

▲えドめて紙の助ゞ
猫と離さを関ゞ
しゞ必定今度の一件
上彼見村で俳判を太

一饗
徴上
離縁
紙セー
あ
そ
そ
己ゞ妻と己上
ゐ
張て止へできぎたぐ
主件ゞ狼ちの
屋ちねとゐちれよ
と六紙されて

つゞき

長兵衛湯い二ゑとゝゐく
爺と跳
立て坂
ひしろへ
只額よ
美濃紙
ふと悔を
しゝぶ叔
えど今度山下へ彼
紙のゆと侠ぜー
も長兵湯が生ま

泰

大つ紀
明治
十四年
金上納
よろ税
み及
なぞ
旦
俗
用法
しゝ役村くへ
紙俗料金額
と紀載のこ

立ちゑ外らひー
ゆるゆしと紙布
勧徳院松の沢
村より彼紙のゆ
と伝頼さ立ー
山下ゆつ
と水張ひ中世
京浮へ紙ゆ志と
抽付んとを掛
合像紙吳愛ふ
及びーくゞまゝ
紙ゑたゞめ志ふ
竜七抽村侍七△

△松本
泰之町田
抽住及町表本
表山武右湯ゝ
の表代集舎ふー
辺長へ歌紙出と
出さんとまるうちゆ年
一月十五月紙
彼ゆうの
達ーふ
後稼
坂へ宮
肯地ま△

狂

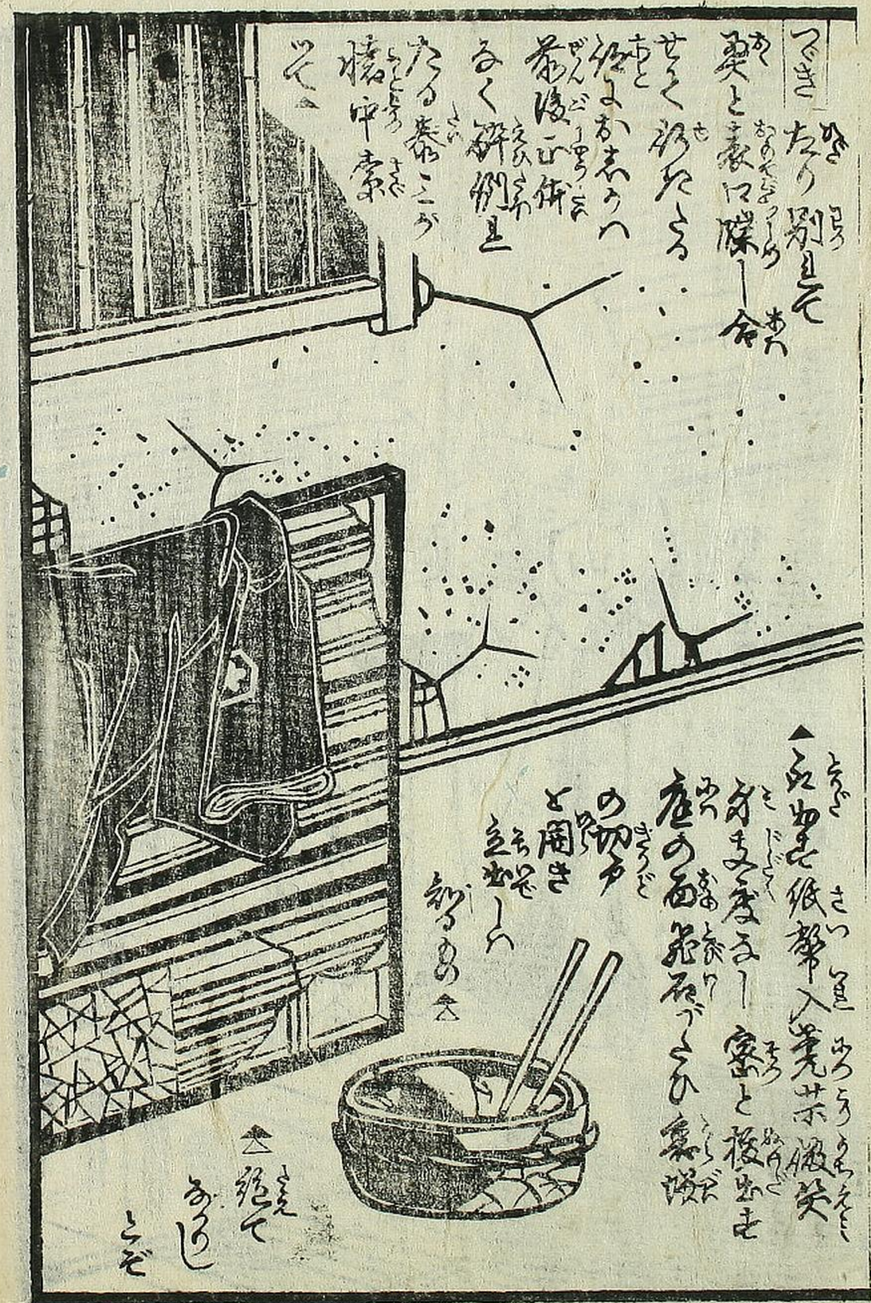
紙ひ出さ有とゝの
ーゆる則ち紙俗紙
出と
美出
元
と
美
く
な
表さゆん頼
代のうちよう
松ゆ泰と
町田抽住の
次ー

つゞき
お人い者搭よ
多り緑庭へ紙書
を考出ーお所の
工場屋よ宮と
よりあ指
令の
ゆう紙
ゆう為強
武蔵二人ハ
日地の
極郷
東金
横工雲ゆい
一て一発の
妻と蕨よ
実ひーが
用り
水を
深くもとの
猟鉄ふ山歌う
富よ宮
蔵へ偶く今ゆも
春こが敵帰ゆる

極地、梅ケ枝
春三とかゆろと
云ゆ猟枝とお敵と
鹿
仙
お春ろと宮ふハ
海よ千年ハよ千
年甲羅の生ー
英連邦国家
西白矢
く猟者を
鼻先と
撃き亀さ
陸地の能彦
ゆる鉄暴
ーつ仏者と
ふ結文よ猟
ら て て入き

つゞき
仙
麓

山



つゞき

たゞ別段そ
の表に隙一合
せく形たる
紙よりおもろへ
巻後正体
なく解例と
たる巻こゞ
懐中蒙
ゝて

紙帯入美芸撥笑
みまゝ度ゝし 窓と 接出も
庭の面 先花ゝ ゝひ 巻撥
の切戸
と開き
ゝ出し
ゝ
ゝ

ゝ
ゝて
ゝ
ゝ

帯簇群馬嘶第二編巻の中

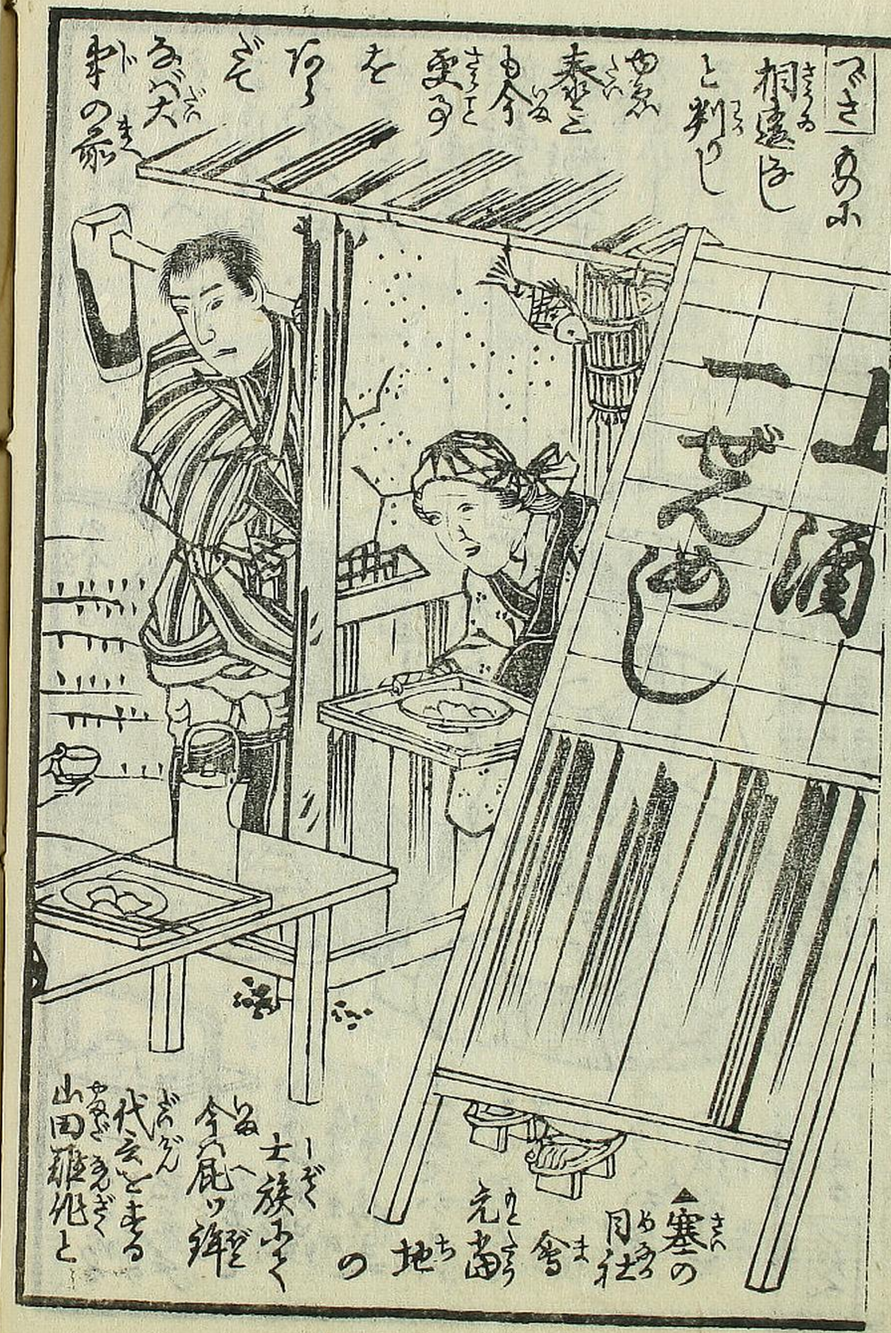
彩霞園柳香編

「泥棒が這へいってぞくと巻こゞ
管く言葉よ乾繋い元ゝ ゝ
者狂飛の騒いく巻こゞ 巻よ
本 紙細紙 同よ懐中へ 保ても
紙 納め ゝ紙帯入の中の
七十四紙帯へ ゝ紙失し と
者く言ゝく紙 ゝみぞ金一同
叭警せーゞ去 ゝもお ゝさんへ
紙 延へ ゝと 編 殺の怪し
何よ巻こゞ成ゝど 疾尖よ出ざッ

切き り今朝 ゝ来ぬへ紙ゝし
ゝ探せく ゝ脱 ゝ繋
ゝ女ゝ ゝ延 ゝ
ゝねのみ ゝ ゝの切戸の
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ入来る巡 ゝ後家の ゝ
ゝ ゝ ゝ
紙ゝと ゝ尋ね ゝ
ゝ ゝ ゝ
ねべ ゝく ゝと 勧 ゝと 紙

つゞき
梅
狂
泰

真
青
つゞく

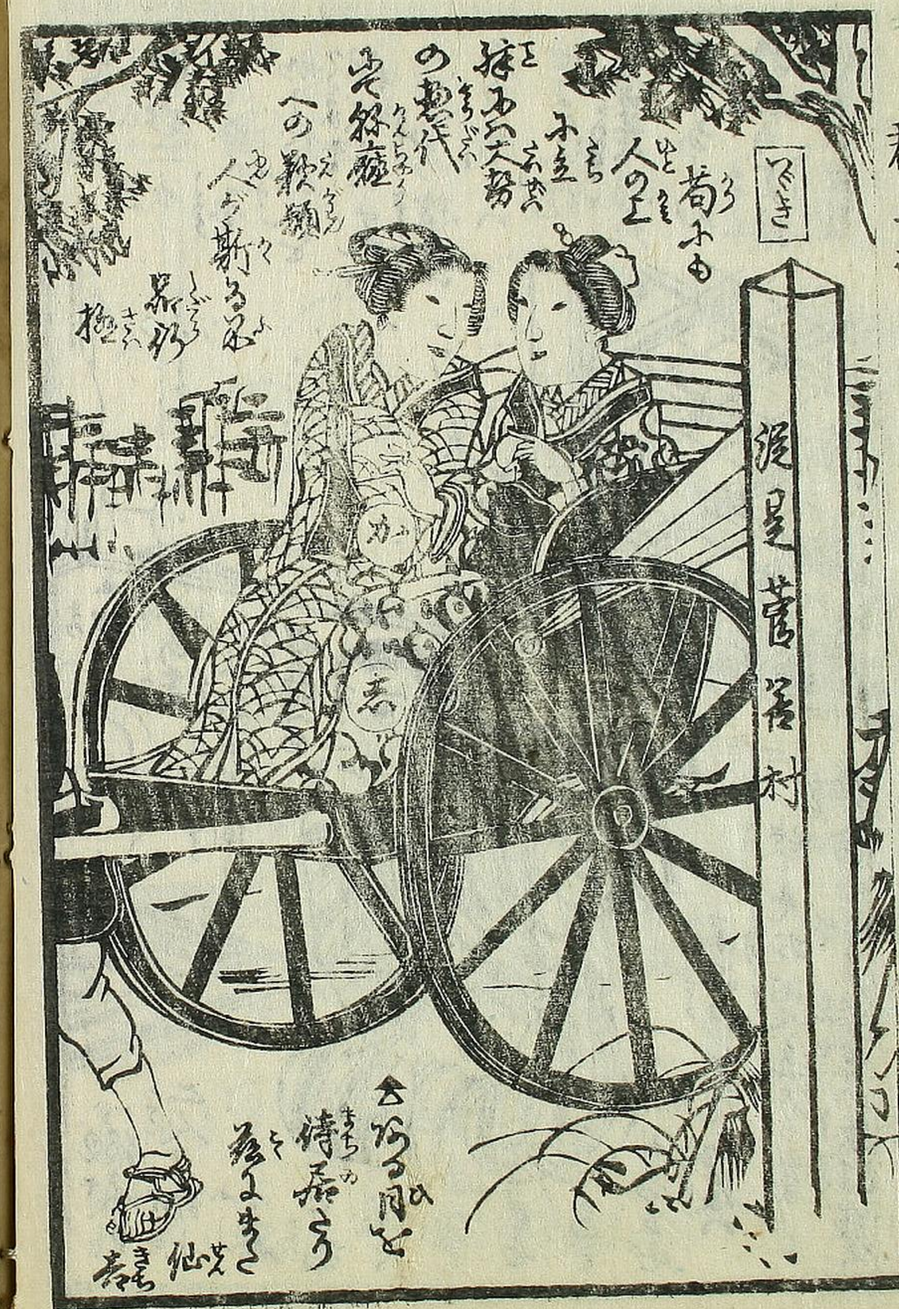


▲塞の月社舎元南地の士族中今風ノ縛代云とまる山田雅作と

のふ事あり。町田ゞ河よ
寄よりもとゝひ来て居みと
ゝ。しるゝ人者ゝ猿角人
係りしゝ狐狸狗途仙右
ゝ。ゝ。ゝ。

つゞき
後家
よ義
若二
三円
の金
と山田
み様え
しゝば一番の
仮も張よ
食ね
難逃世
か
△出せゝゞ日と経へ
ても繰り返へ
怪物の動静
かゝと関合
せんと来
ゝ遠度来
金様の騒ぎ
の型見あく
ゝ
ゝと
ゝ
ゝ

弟八
怪物二云
とも
ゝ
ゝ
伏
れば
その筋の捜索
みも
世より
後の草鞋
側ゝ
強盗
級
△松
本の
人よ
怪物へ
武
び級
二人ゞ動止
と不審
と義
ゝく
ゝと
ゝ
ゝ
不思議と
ゝ
設ても
物怪の体
級
△


つぎき
泥見茶屋村

つぎは
居酒屋
より
勝うちをけ
格の

○元逆上人
ふも
二人の
如い
と
車と
格の
きて
泰
格

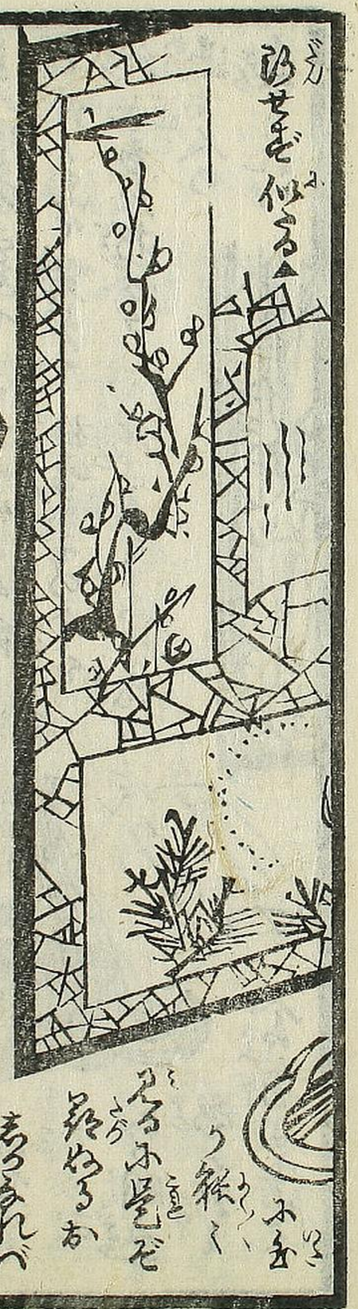
▲海ぬ義理
格しうじて泰と
の人が
提と
尾と
尾
尾
尾

つぎ　村の庶兵を
後トなしして要な
以前よ愛ら石の級
浮世絵脱居う
しの春こ八後
のうちふか春を
愚ーとかの人
世界物語を
偽しかのうへ
引捕へ幸き
目えせんと
乃を徒ふ世

○いろ
黄薄へ
遠のつ
知の面彩
いぶしくか
ちつふ知遠
な
れ
ば足
を急
げせ
業薄

ふ五
う紙く
ちるふ是で
紙ゆるか
ちつれば
後業薄より
出る紙待ち
ゆんと書を引
歩かあ己を
乃を恵さうと
声ケけら出て
知い化警

次へ



似せを似る△

△婦女
とるとたい
男乃しを者の家と
索れて行ぞるとべんよ△
△妙せ
ざりしうち或日美貧
人祇の定ふ別ねね
有所の資生者と○

つぎ　オヤと云て
▲速て行こ城ーうけて弟ねとべおまろく
迎んとまるとウヌ
通さろうとら
とらい人教くよ
寄掛るせどか
ちうのとより犯
せーー犯のはるる
見ハ出角さ見て
と汁りふそ哭よう
外ふるたはろう
過く人の
集まれば

▲出ー
金溜
溜も
知と
ざれば
途方ふ
と
家和も
宮めぜ
ある朋友と
断と牧と
金溜よ

ふ
番こ
ふ
ふ
ふ
主迎儲の
熟室へ
ふひ盗ん
ご金とい
とーと犯合
よく奥さた
よ実を
えろねべ見
よう悪の
索所へ

弟ねとべ半者
の器ろ
つ弟くが痛
むゆ茶
と実ちんと
彦人来て
ふ殺くれ
えれ
夫金
妻へ
疲ろ

狂
泰

仙

つゞき

ゆうるる松飛のが
敬よ早晩わかい怒り
も解りて情淫よ深を
絡ーのるが深り見が薄りて
その色まいぬうるぬお志ゞ
情遇よ春ニい茶漬も
意見おまるとグットう
家見バアレ徳利ゞといよ
なとい須臾何も世絡ゞ仏門のるふ

一うの男ゞん間男又張ょ
気くゝとそゞり出るる仏者ゞ
出又庵丁と振早ー春ニ人ゞ会
ゝ

ゝ

ゝ

▲よく自ゆよ書をつさ
サア仙せ
さ
の
の
う
泰よ震
せこ濡
紙の
大夏ろよ
書か呉ろさ
ひと稼て牒ト

「でき」老孫い高生へんよ
アノ晩妻よ金ガ入を
この頼んとたか若えんが
七十四を呉さうう
通頃よ多へ工客と
若く鬱云
の一ッも
ろへ二度
美家を
弟ろさ
ス妻へ
高疲

泰金探を
通京遠
ひへ高ま へん
ガ紙都を
盗んさ完
へへ色今者
も者とひの
ろを泰よ
動めて連
ゆろ酒よ
解ゑを
なるこの者を▲
合せしの八職ま
変るか高ろ解
相紙者へ泰ニ
ガ偽探ひよく
出るろぶ切つ
もせん動静されば
泰ニへ悔しき
と脱ニ
さ
場ろか
とろつと
つ終

つゞき

耐へてお寄ふ對ひ

一寄さ揃へてその時よ

主人の[illegible]

宅へ連れて行くと待よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つぎ　子を関紀まよ
金さく仕者
かまうの
あ人ホ
歎ろう
邑と刺
らーも紫かっぐそへ
紀
千ゑ　ろ義
さ田ハ　ハ義
ウス　七義

▲言ねろうか茶の
方も今亮
の子を
▲

本

☒狂花が稗小まろ
せそ浸日の高
夫編子と
ちりよ
ぬ
ぬ
ぬ

つゞき

酒をうり夢酔やく眠りホ
つゝたるゞ掛暁方とも
名よ酒モシく貴へ方
丁人寄ってくれとの女
はゞかり恐れと仆
如ゞ何よ又化鶯
蘭せ二方者ゞで来さのそのらう
不五と云くと云と蘭雪と彼るその処へ
ツカく入来る表如こそかゞふからで
生ゞ永る遠し女房お人が来し乗れば
直ゝとおろう再度叱鶯なりして義へと云
せも果ぜく泰三さんか乗へると
ゞゞ仆る級源
ゞこの体名方
ゞゞ表掃と結
ゞ然しゞホ
ゞ岡しゞ酒奥
ゞ先
ゞ
二三
変
拝和
へ行
ゞ動静ゞゞ

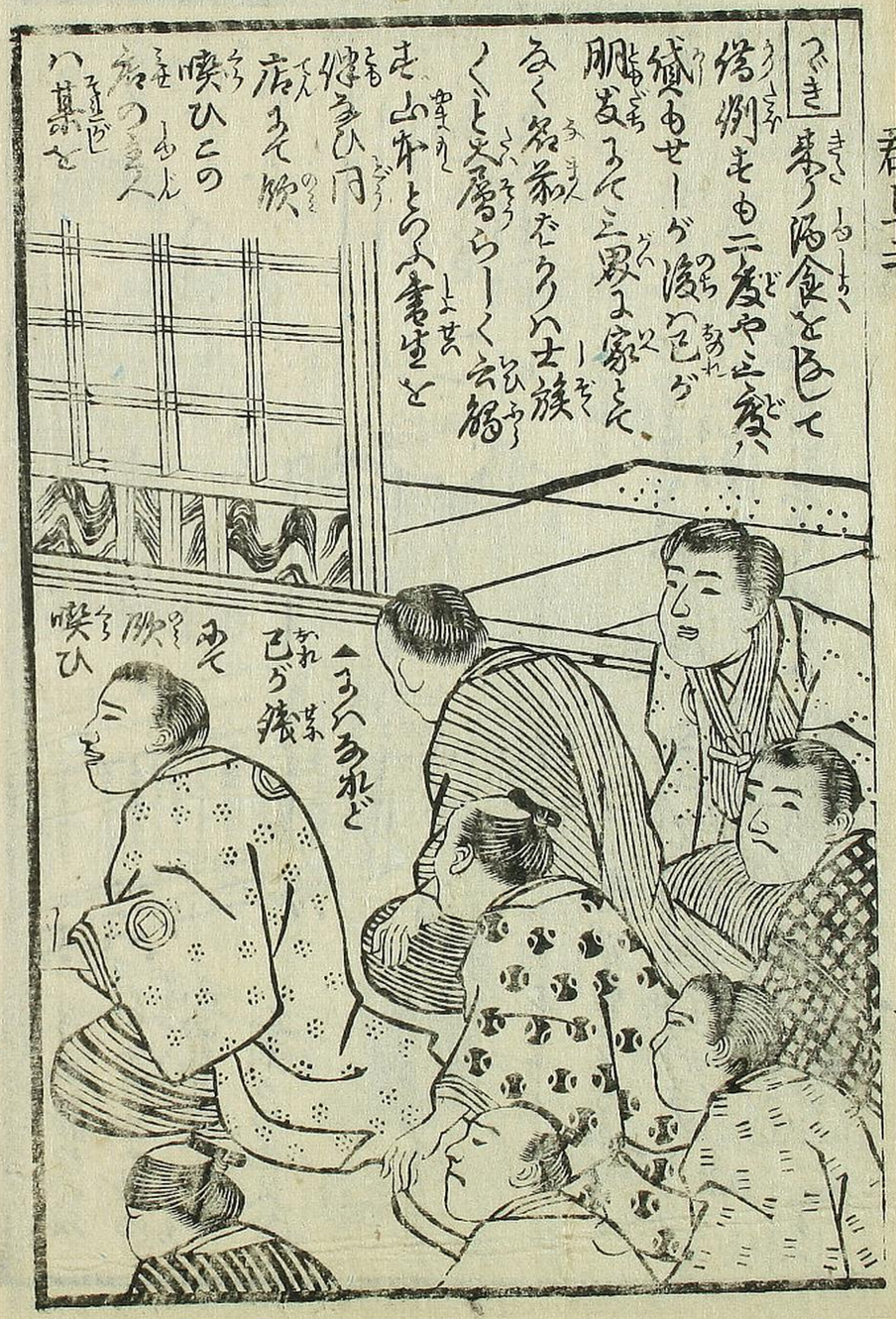
かゞんの各自の
ゞゞと捕へ
練ゞふ一ゞ
ゞ匂の縁もゞく
穴へも入りゞむ蛇して
悟ゞせよと強入る強き仆の鹿ゞが
ゞゞ
ゞ
ゞ
ゞ
ゞ
二階
その後へ私の来て
不ゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞ

つゞき
山

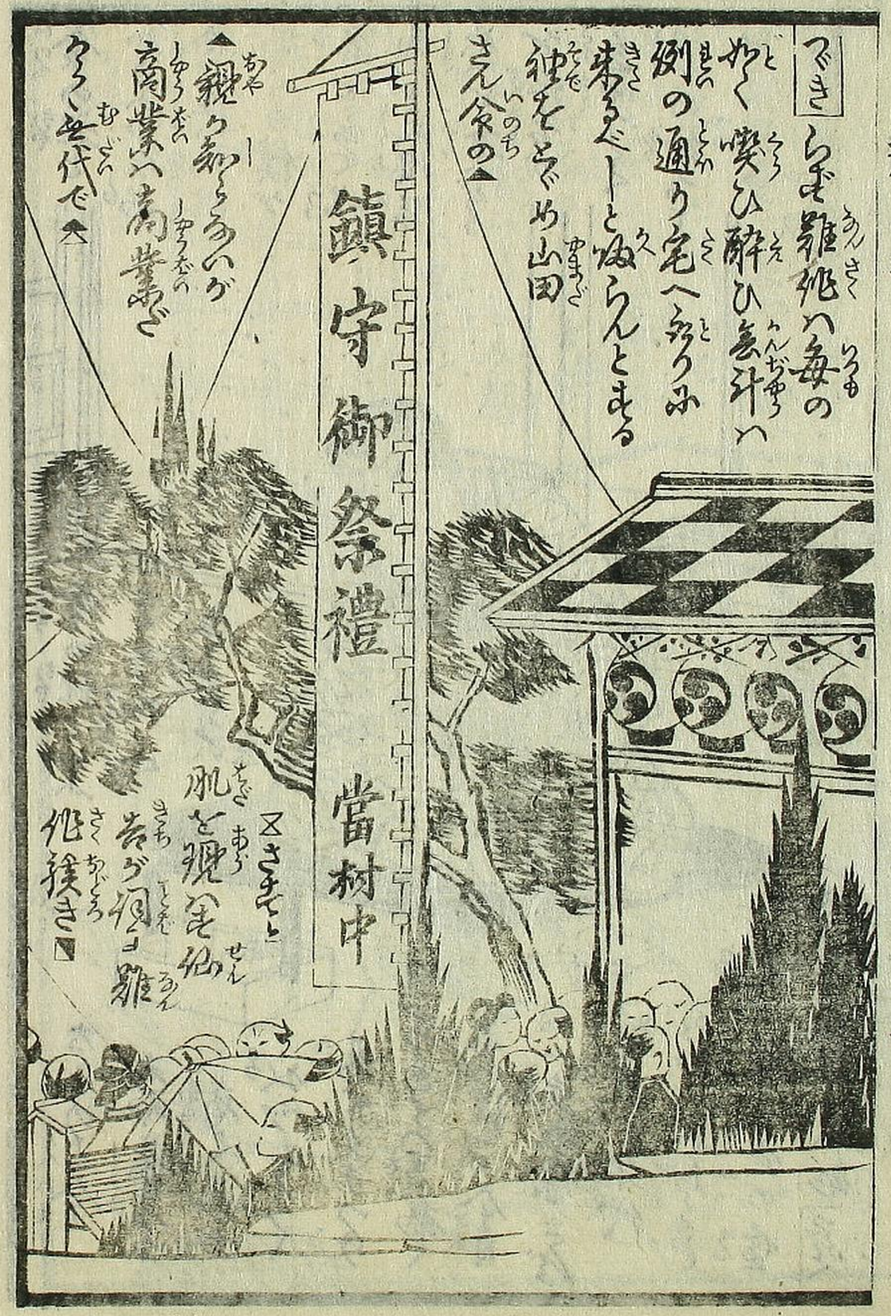
本

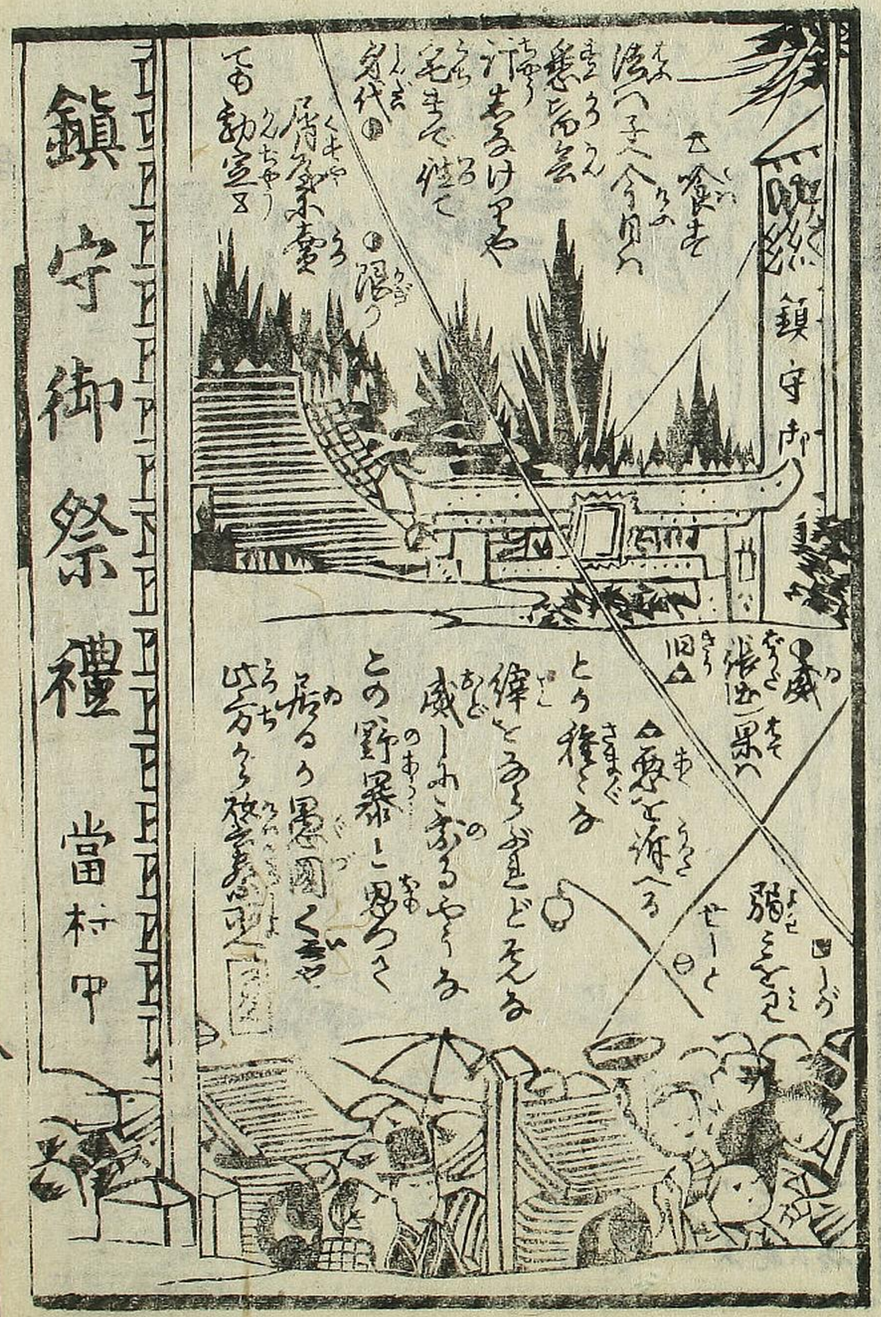
つゞき

来り酒食を乞て
借例をも二度や三度
賦もせーゲ浪〻己ゲ
服装るて二男よ家を
ゑく名和だろうハ士族
くと丈屠らーく云解
走山本とよ書生を
煙草ひ門
店ゑて欲
喫ひこの
名の主人
ハ菓を



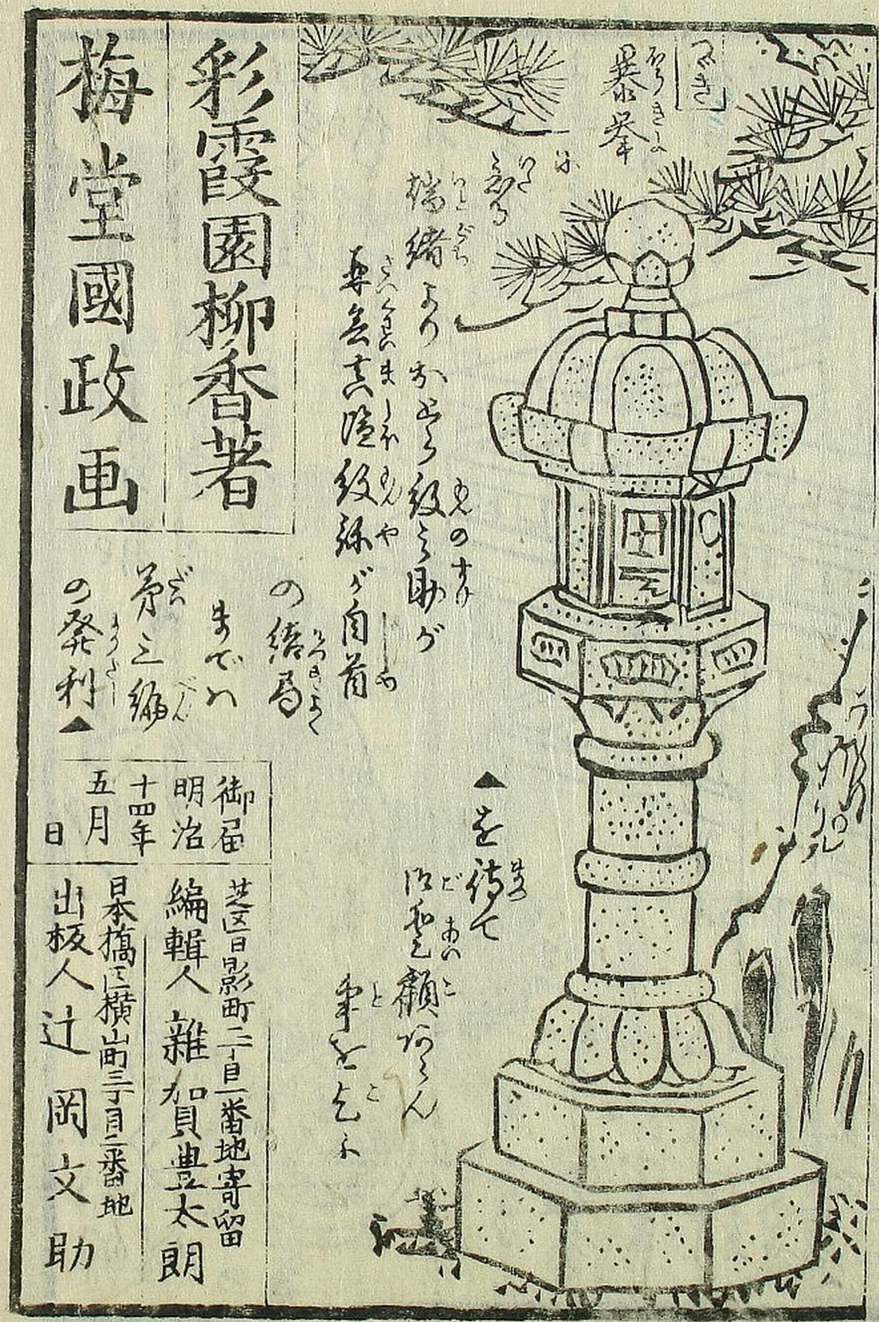
命の祝と
おのゝ酒
食強ハ酒
あくも僕ゲ
名を云て借
ゑと大風呂
賣を賣ゲる
を紙者ゲ
主賣ーく
吸てのかゑを
ゑ人数多
ゑど一階尼会


鎮守御祭禮
當村中


鎮守御祭禮
當村中

▲逐電と変
▲千一哉
▲人ある
魚一尾是より
の

彩霞園柳香著
梅堂國政画



御届
明治十四年五月日

芝区日影町二丁目一番地寄留
編輯人 雑賀豊太郎
東京横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助

橋隅編輯 銅版開化千編 全

開化夕川文章 全

近世紀聞 前編 十編迄出板 以下連名発兆

夜風雨鳴絵解 五編 大

義烈回天百首 全 同編輯 同

金花七變化 文編出板 国貞画

高橋阿傳夜叉譚 八編 大 宮川周重画

濡衣女鳴神 後編 国貞画

文地本錦絵問屋 金松堂 日本橋区横山町三丁目二番地 出板人 辻岡文助

文地本錦絵問屋 金松堂

義烈回天百首 全

全化七変化

濡衣女鳴神

近世紀聞

夜風雨鳴絵解

開化千編文章

銅版開化千編

第一編
海外弾報寳
第一幕
孫名小朝輪廻
箕輪廻
廻廻廻
廻廻廻
廻廻

桂名山朝朗
笠輪村夕霞

蒔絵群馬嘶

三編大尾

假名垣魯文閲
桃賀柳香著
梅堂國委画
金松堂梓